

南方釜田遺跡現地説明会資料

1986.8.31

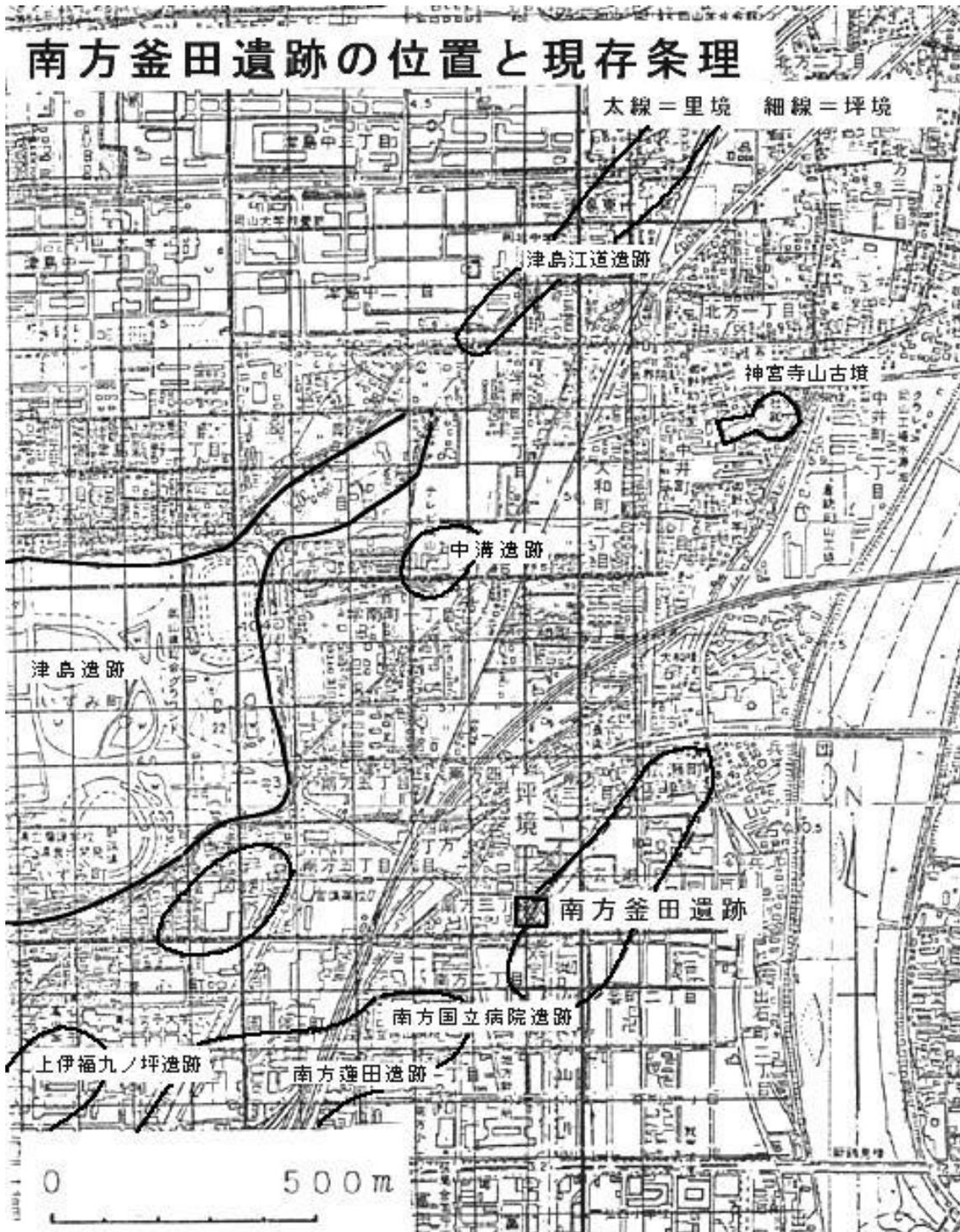
岡山市教育委員会

福武書店本社建設事業埋蔵文化財調査委員会

南方釜田遺跡は、旭川西岸の沖積平野部(岡山市南方三丁目・広瀬町一帯)に位置します。福武書店の新社屋建設予定地が遺跡内にあたるため、本年4月から発掘調査を行ってきました。建設予定地は先年まで水田・畑であった所で、現在はこれを埋立てた厚さ7.0cm程の造成土で覆われています。この昭和の水田からその地下80cm(にかけては江戸時代から鎌倉時代に至る水田跡が一面に埋もれています。さらにその下(現地表下1.5m以下)になると遺跡の状況が建設予定地の東と西とで大きく異なります。東側は、西側に対して高く(当時の旭川の分流に沿って北東から南西に延びる中洲・微高地)、平安時代から弥生時代に至る集落跡が埋もれています。平安・奈良時代については古代御野郡広瀬郷の中核村落、またそれ以前とりわけ弥生時代についてもかなり生活密度の高い大集落の一部と考えられます。

一方・西側は低く、ここには平安時代から弥生時代に至る水田跡が埋もれています。つまり、用地は平安時代以前の集落と水田の境界付近にあたるわけです。

発掘調査は、先ず建設予定地の西側約1100㎡の発掘区から開始し、現在弥生時代後期末(現地表下約2m)の土層まで掘り進んでいます。ここでは先のような事から平安時代以前も水田が広がり、江戸時代から弥生時代後期末まで16枚(16の時期)の水田遺構面を確認しています。各水田遺構面では畔・水路などが検出され、各時期の水田の区画の形態・大きさ・方位・地割などが明らかになりました。また、水路や水口の状況・水田面の高さなどから水配りや水田区画と地形との関係が推定されます。さらに、多くの時期の水田面を確認したことで、以上の事柄の歴史の変遷をとらえることができ、この地の開発史を考えさせてくれます。すなわち遺跡の周辺は現在、正方位(正確な東西南北)に軸線を合せた一町(約108m)四方の水田区画が碁盤の目の様に整然と並びいわゆる条里地割もしくはその痕跡が広範に認められますが、その一町区画の線(大畔・坪境)が発掘区を南北に縦断するととも手伝って、自然地形に規制された不定形水田から現在みられる整然とした条里水田の成立過程をたどることが出来ます。また、弥生時代に集落の営まれた微高地が次第に削られ水田が拡大される様子も明らかになりました。その他、古墳時代の中頃の水路から豊富な木製遺物が出土し当時の生活を偲ばせてくれます。



今後発掘調査は、西側発掘区の弥生時代後期以前の水田を調査の後、東側の集落跡部分にとりかかる予定です。

以下、西側発掘区のこれまでに調査を終えた水田跡の概要を時代順にしめします。

1、江戸時代中頃(18世紀=今から200年程前)

近世南方村の外れに当たっていたようで、水田・畑が広がっていますが、北西部は屋敷が迫っていたらしく、日常雑器や瓦を捨てた大きなゴミ穴がありました。日常雑器には備前焼・唐津焼・伊万里焼などがあり当時の雑器の構成や流通の様子が伺えます。また、地下1mの粘土を採掘した跡と思われる大きな穴が水田・畑の畔に沿って20近く穿たれていました。瓦などの焼物用の粘土(田土)を採ったものと考えられ付近に当時の窯場があった可能性もあります。

2、中世後半(15～13世紀頃=今から600～800年程前)



発掘区を南北に貫いて、大畔が延び、その東西には一筆一反の細長い長方形水田が整然と並んでいます。大畔は現在周囲にみられる条里地割の一町四方の区画線(坪境)の真下にあたります。また一町四方が一定方向におよそ十等分され細長い長方形水田が営まれる状況も周囲の現存条里水田に一般的にみられるもので、現在周囲に見られる様な条里地割がそのままの形でこの時期まで遡ることが示されました。

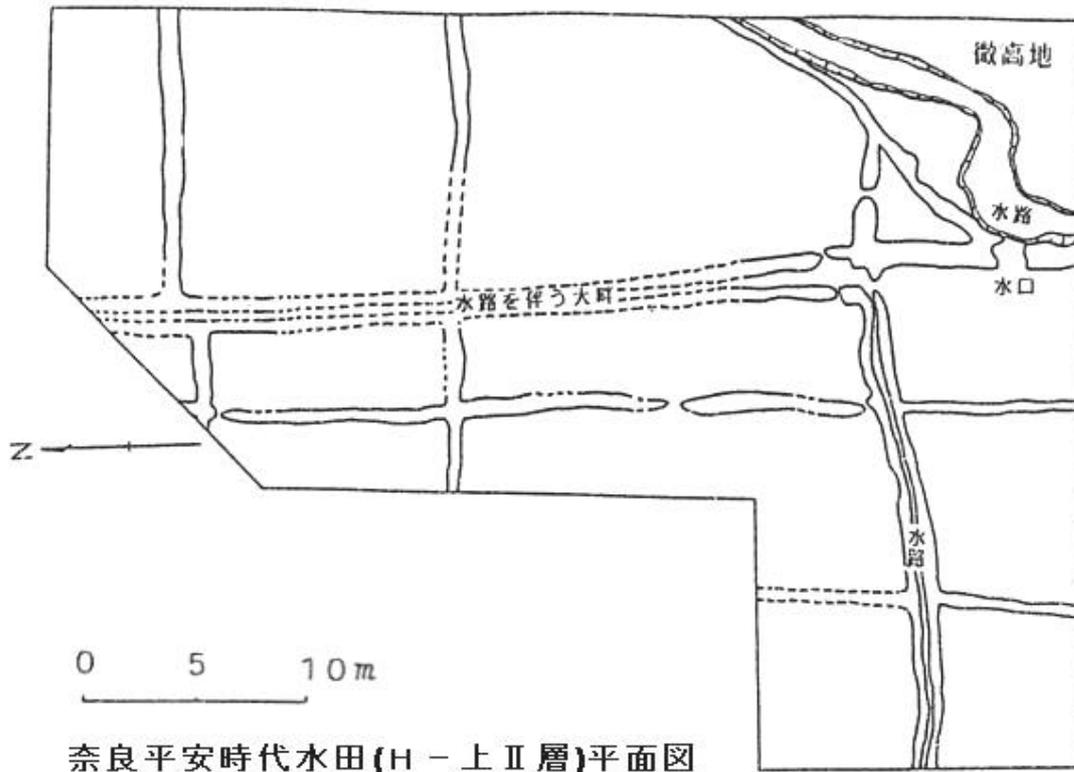
3、中世前半(13～12世紀頃=今から800～900年程前)



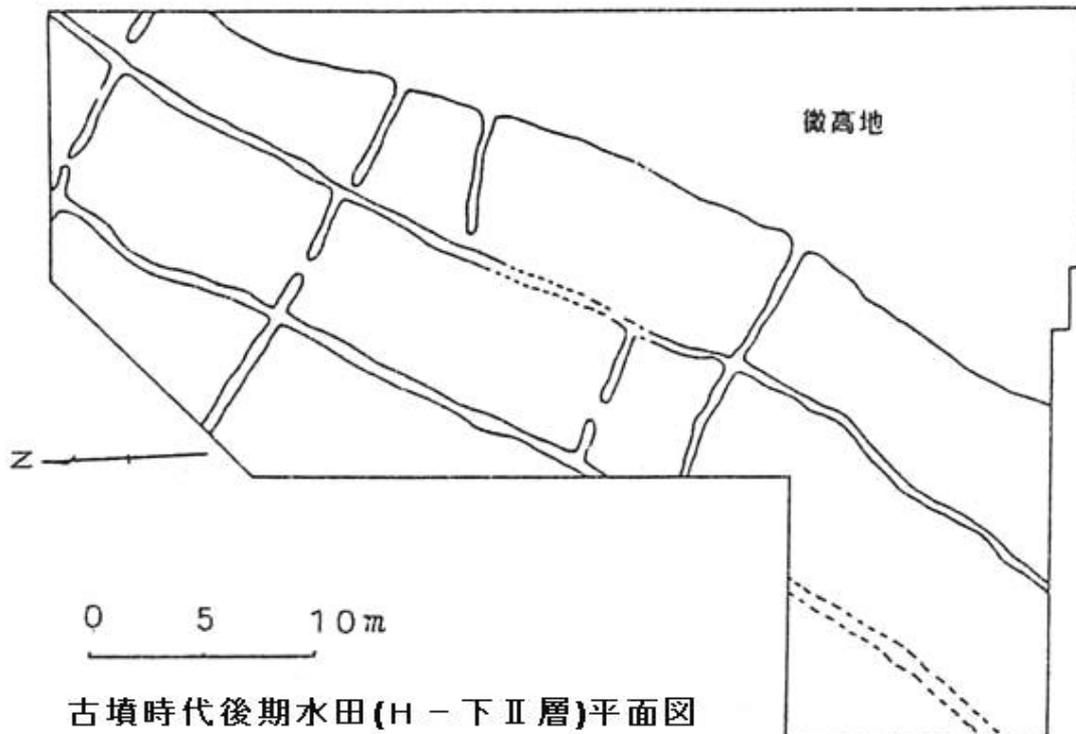
先の大畔(坪境)の真下に同じく大畔が延び、さらに各水田を区画する畔も正方位に沿うもので、これも先の条里地割に基づいた水田です。ただ、現代や中世後半の条里水田と大きく異なるのは水田一筆の面積が非常に小さいことで、各々 2 m^2 から 15 m^2 ほどしかありません。また、坪境の大畔を東西に横切る浅い水路も認められ、条里水田といっても新しいものとはかなり異なった景観が予想されます。なおこの水田は平安時代以前の集落(微高地)を大規模に削って造成されたもので、この期の大幅な耕地拡大と集落立地の変化を予想させます。

4、奈良・平安時代(9、10世紀=今から1200～1300年程前)

先の大畔(坪境)から東へ5m程ずれた位置にやはり正方位の南北に延びる大畔を確認しました。各水田を区画する小畔も正方位で、条里もしくはこれに近い地割が確かにこの時期に成立していたことを示します。水田一筆の面積は再び大きなものですが大きさはばらつきがあります。大畔に沿って北から南に延び、途中で直角に西に折れる浅い水路も見られます。しかし、水田部分の正方位性とは対照的に集落(微高地)と水田の境界部には自然の地形に合わせて北東から南西に流れる水路が穿たれています。この期の水田造成が自然地形をある程度克服した正方位(～条里)地割に基づくものであるけれども、自然の起伏(微高地)を大幅に削ってその形を方位に合わせて整えたり、これを削り飛ばしてしまうものではない事、大畔に囲まれた大区画が小畔によって水田一筆ごとに細分される様子(坪割)や現在・近世・中世とは異なったものである事が示されました。



5、古墳時代後期(6世紀 = 今から1400年程前)



先までの正方位地割から一変して、自然地形に合わせて北東から南西に延びる細長い水田が格子状に比較的整然と並んでいます。所々には水口が切られ、北から南、東から西へと水が配られていった様子が伺えます。

微高地と水田の境界は西側発掘区の三分の一迄広がっています。古い時期の遺構面程この境界が西に迫ってくる事は、逆に弥生・古墳・奈良・平安そして中世と東へ東へ次第に微高地が削られ水田化されていったことを示します。

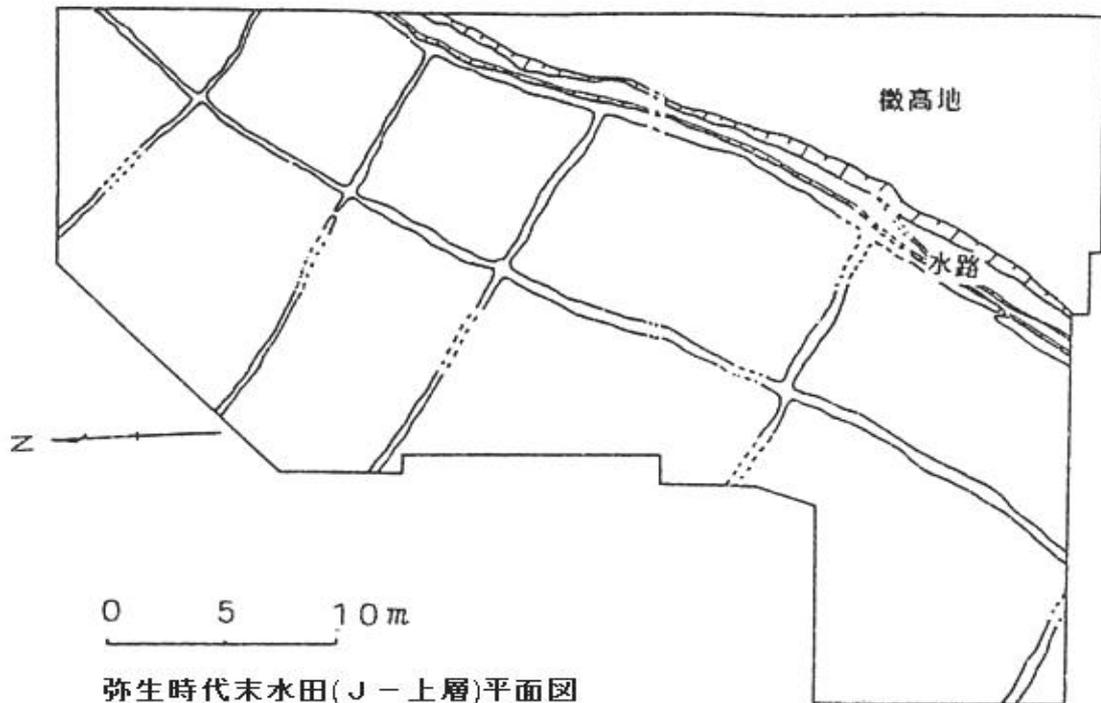
6、古墳時代中期 (5世紀 = 今から1500年程前)

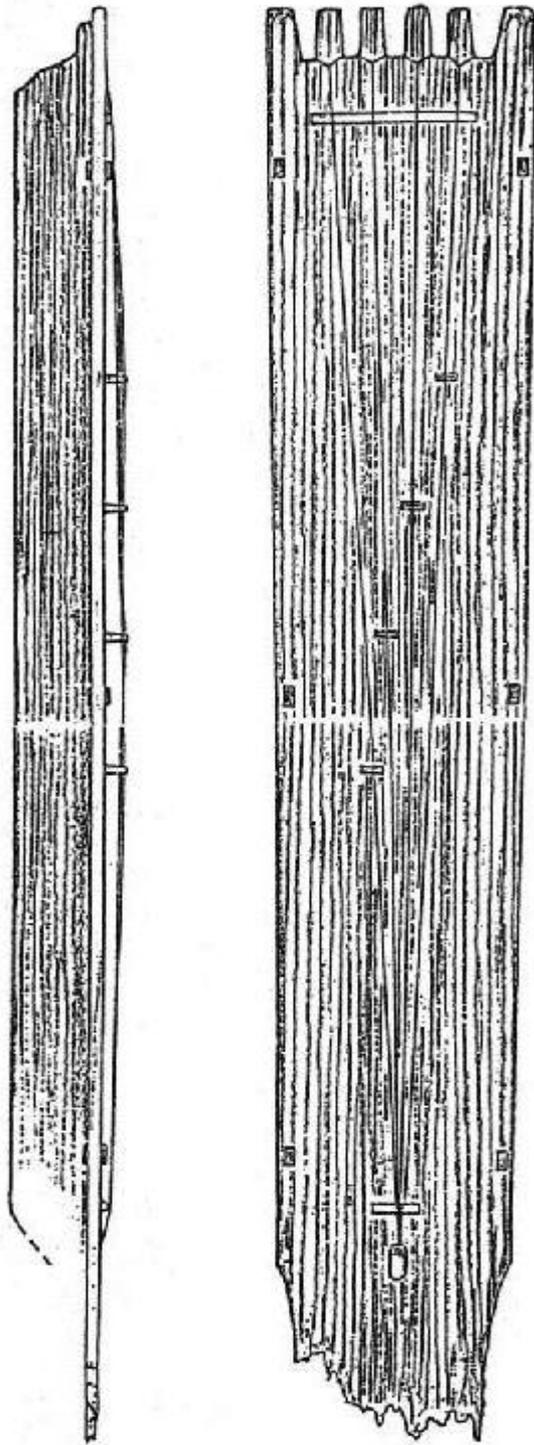


この時期の水田は上の6世紀の水田に削られて残っていませんでしたが、水田の間をぬって自然地形にやはり合わせて北東から南西に穿たれた大きな水路が確認されました。この水路は、幅2mあまり、深さ約0.6mを測り、水流調節の小さな井堰や集落方向へ延びる枝溝を伴っています。この水路からは、小壺、高杯などの土器類の他、豊富な木製遺物が出土しました。木器には、ナスビの形をした鍬・鋤や大足もしくはマグワなどの農具、藁打ちなどに使う槌(砧)、ヘラ状の木器、漆塗の櫛、それに楽器の琴などがあります。琴は弦(4弦?)を張るために片方の端部に突起を造り出した表板(推定長約110cm、幅約20cm)の裏側にくりぬき式の共鳴箱(槽)を取付けたものです。この他、端部を丸く削りだした棒・護岸用の杭・建材と思われる厚板、それに流木やタニシの貝殻・桃の種なども出土しています。また、この水路や微高地斜面からは、滑石製の双孔円盤(鏡の模造)・手づくね土器(内に小玉を入れ丹を振りかけたものもあり)・丹塗の石などが出土し、琴と同様、この地で行われた古墳時代の”まつり”を偲ばせます。

7、弥生後期末～古墳時代初頭（3～4世紀＝今から1700年程前）

先の六世紀の水田とおなじく自然地形に沿って北東から南西に細長い長方形の水田が営まれています。微高地と水田の境には、浅い水路が設けられこれらの水田を潤していたようです。この水田の地下、先の五世紀の大きな水路のほぼ真下に当たる位置には弥生時代中期のさらに大きな水路(未発掘、木製遺物多そう)がありますが、それはこの時期には殆ど埋まって水田となっていたようです。先の五世紀の水路と六世紀の水田と合せて一度掘られた水路が埋まって水田となる事が繰返し行われた状況が伺えます。木きな水路の掘削は、特に水路の下流部の開発を予想させます。なお、この西側発掘区でも微高地の上からは弥生時代の素掘穴が多く認められ、水田ぎりぎりまで密度の高い集落が迫っていた様子が伺えます。





古墳時代琴復元図